

## 2-1

### 腹腔鏡・内視鏡合同手術にて切除した十二指腸カルチノイドの1例

金沢大学 心肺・総合外科<sup>1)</sup>

福井県済生会病院 外科<sup>2)</sup>

角谷慎一<sup>1)</sup>, 石川紀彦<sup>1)</sup>, 渡邊 剛<sup>1)</sup>

島田麻里<sup>2)</sup>, 天谷 奨<sup>2)</sup>, 宗本義則<sup>2)</sup>, 三井 毅<sup>2)</sup>

【はじめに】今回、十二指腸カルチノイドに対し腹腔鏡内視鏡合同手術Laparoscopic Endoscopic Cooperative Surgery(以下LECS)が有用であった1例を経験したので報告する。

【症例】症例は69歳男性。十二指腸球部前壁の粘膜下腫瘍のため当科紹介となった。EUSで第2～3層から発生する7mmの低エコーな腫瘤として描出され、第4層への浸潤は認めず、生検でカルチノイドと診断された。胸腹部造影CTではリンパ節腫大や遠隔転移は認めず、T1N0M0、stageIと診断した。根治性と低侵襲性を考慮して十分なICのもとLECSを施行する方針とした。手術では、まずESD手技にて腫瘍周囲に全周性に粘膜に切開を入れ、さらに約半周性に全層を切開した。次いで、腹腔鏡下に粘膜切開ラインを確認しながら超音波凝固切開装置で十二指腸壁を切離して標本を摘出した。腹腔鏡下に十二指腸切開孔を縫合閉鎖し大網を被覆した。出血量は少量、手術時間は2時間2分であった。病理組織学的検査ではカルチノイド腫瘍、sm3、ly0、v0、LM(-)、VM(-)であった。

【まとめ】本例のような転移のない限局性のカルチノイド腫瘍において、全層切除を可能とするLECSは根治性と低侵襲性の面で有用であった。